



Title	外国人保護者への言語支援と自分に課せられた役割
Author(s)	関崎, 友愛
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



2006年3月に博士前期課程を修了した関崎(田中)友愛と申します。現在、埼玉県で個人事業「日本語サービスYOU&I」を立ち上げ、地域に住む外国人住民(特に乳幼児を育てる外国人保護者)のエンパワーメントにつながる日本語学習支援を行うとともに、地域社会(行政や子育て関連機関)への「やさしい日本語」研修等を通して多文化共生の意識啓発に取り組んでいます。また令和3～4年度にかけて文化庁「日本語教育の参照枠」における「生活Can do」開発業務において「子育て・教育を行う」Can doの開発に関わり、日本に住む外国人保護者の言語課題(子育ての日本語)について考え、実践し、研究しています。また令和3年度より埼玉県地域日本語教育コーディネーター(委嘱)として埼玉県の地域日本語教育推進事業への助言、提案、県内の地域日本語教室の日本語教師や日本語ボランティアを対象としたスキルアップ研修などを担当しています。ここにたどり着くまでの道のりが、これを読んでくださる皆さんに少しでも勇気を与えることができれば、この上ない喜びです。

地域での活動を始めるまでの道のり

私は大阪外国語大学日本語講座(学部)を卒業した後、台湾の日本語学校で2年働き、帰国後博士前期課程に進学し、修了後は海外技術者研修協会(当時)関西センターやCJLC、大阪大学、大阪産業大学、京都大学など複数の日本語教育機関で日本語教師としての経験を積みました。当時は目の前の学習者に「日本語を教える」ということに必死で、寝る間も惜しんで教案を練り、楽しくて役立つ授業をするために試行錯誤する日々でした。今振り返ると20代で多様な学習者への日本語教育を経験したことは非常に貴重な経験だったと思うと同時に、当時は一人ひとりの学習者の言語課題とそれを実現するために必要な日本語能力とは何かということまで考えが及んでいなかった未熟な自分の姿を微笑ましく感じます。29歳の時、さいたま市にある国際交流基金日本語国際センターに専任講師として着任し、海外日本語教師研修、JF日本語教育スタンダード開発、JFロールプレイテストC1レベル開発などの業務を担当しました。そこでCEF Rについて深く学ぶ機会を得ましたが、当時は言語学習を文字・語彙・文法の知識量で捉えず「その言語を使って何ができるか」という側面から捉えるということばかりを考えていました。Can doベースで日本語教育の教授、評価を考えるとはどういうことか、志高い同僚と共に試行錯誤し実践する中で、日本語教師としての専門性を高められた期間でした。

35歳の時、第二子の出産を機に日本語国際センターを退職し、2年後に第三子を出産し、子育てを中心とする生活が始まりました。母として地域で3人の子どもを育てる中で、二つの出会いがその後の私につながる転機を与えてくれました。一つ目は、多様性のある子どもを尊重する子育て支援センターとの出会いです。乳幼児二人を連れて毎日のように足を運び、子育ての小さな悩みや困りごとを聞いてもらったり、そこでよく顔を合わせる他の母たちとお互いの子どもの成長の喜びを共有したりしました。そこには実母のように思えるほどのスタッフの方々との信頼関係、同士とも言える地域の母たちとの温かな「つながり」がありました。社会とのつながりを感じにくい子育て中の保護者にとって、子育ての喜びや悩みを共有できる母仲間とのつながりが地域に

あること、共感や寄り添いを実感できる居場所が地域にあることがいかに大切かを知りました。そんな中、二つ目の出会いがありました。あるバングラデッシュ人のお母さんとの出会いです。彼女は同国人の配偶者の仕事のために3歳の息子連れて来日し、日本語学習の機会を得られぬまま異国での大変な育児に明け暮れる毎日を過ごしていました。彼女は子育て支援センターに来て、周囲の保護者から話しかけてもらえず、いつも孤独でした。私はベンガル語の翻訳アプリをインストールしました。そして次に彼女と会った時、翻訳アプリを片手におしゃべりをしました。初めて彼女の笑顔を見ました。その次に会った時には、アプリを駆使して地域の子育て情報を翻訳して教えたり、地域に日本語教室を紹介し、連れて行ったりもしました。私の心に静かに明かりが灯り始めました。社会で自分のやるべきことが見えた瞬間でもありました。これまで培ってきた日本語教育の専門性を真の多文化共生の実現のために活用したい、これまで実践し続けてきた日本語教育を日本語学習の機会を得られない地域住民にこそ届けなければと思ったのです。

地域社会の現実

地域での活動を始めると、驚きと衝撃の連続でした。日本語教師である私にとって異文化相互理解、多文化共生、多様性＝豊かさであるという視点は当たり前のものでしたが、日本の一般社会がいかに閉鎖的、内向きで、外国人住民の生活や背景に関心のない人が多いかを思い知ることとなりました。外国人保護者と日本人保護者の交流会を開催しても、日本人保護者の参加目的は自分や子どもの英語学習であったり、「異文化交流なのに英語で話さないの?」と質問されたりしました。同じ幼稚園に外国籍の家族がいても、彼らの来日理由や文化背景、今後長く日本にいるのかといったことに無関心な人が圧倒的に多いのです。幼稚園や保育園へのヒアリングからは、園と外国人保護者間のコミュニケーションのすれ違いが浮かび上がってきました。外国人保護者は個人面談の際に先生に話したいことが思うように伝わらず、聞きたいことも聞けず困難を感じている一方で、園側はコミュニケーションには問題がないと思っているケースが多くありました。また父親が日本語ができるから父親に全て話せば問題ないと考えている先生も多くいました。他の児童とトラブルがあった際、母親が日本語が分からないという理由でコミュニケーションを諦めている先生もいました。また、外国籍の子どもは忘れ物が多いと一般化してしまう先生にも出会いました。園からのお便りが外国人にとっていかに読みにくいものであるかに気付く先生は少ないのです。このように、日本社会側が地域に住む外国人住民の状況や背景、苦悩を理解しようとせず無関心であることが外国人住民の社会参加を阻んでいる現場を次々に目の当たりにしました。

自分に課せられた役割と地域日本語教育の展望

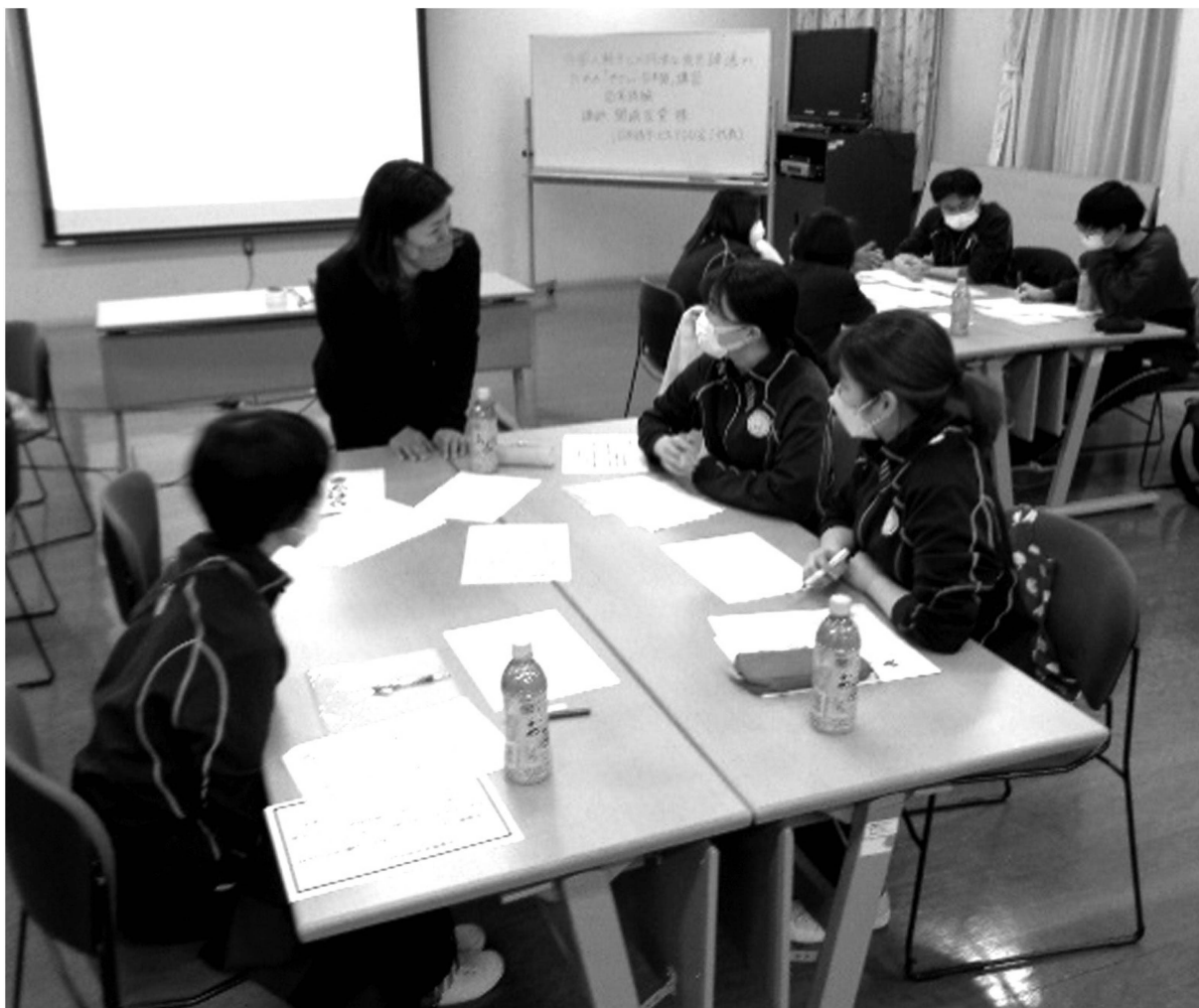
日本に住む外国人住民が日本語を学べば、共生社会が実現するのでしょうか? 答えは「いいえ」です。様々な背景を持つ人たちが対等な関係で日本社会を構成し、共に社会に参加し生きていく、豊かさあふれる時代がすでに訪れていることを日本人住民が理解し、日本社会も変わらなければなりません。多様な背景を持つ人たちと歩み寄り、相互理解をはかり、対等な関係を築くことが当然のこととして実践される社会にならなければなりません。

地域日本語教育における日本語教育専門家の役割に大きな可能性を感じます。私たちは日本語教師として外国人住民の言語課題に寄り添い、社会参加、自己実現のための言語支援ができるだけでなく、日本社会と外国人住民の仲介者として両者をつなぐことができます。両者にコミュニケーションの歩み寄りや異文化理解の方法を示すことができます。今後、地域日本語教育には子育て支援や母子保健、教育、医療、防災など、日本語教育の領域を超えた連携が益々求められていきますが、そこには必ず「つなぐ人」が必要なのです。地域日本語教育に携わる日本語教師の醍醐味とも言えます。

日本社会に外国人住民を「社会的な存在」として捉えるための種をまき続ければ、いくつかは芽が出るでしょう。やがて桜が満開になるように、日本社会が真に豊かな多文化共生社会となる日が来ることを願い、私は今日もせっせと種まきを頑張りたいと思います。



外国人保護者と日本人保護者の子育て情報交換会(助産師をゲストに)



児童館スタッフ対象「やさしい日本語」研修

参考URL:「日本語サービスYOU&I」 <https://youandijapanese.amebaownd.com/>

